

## 風を切って走る

朗読者 今村敦子

5 「頑張れー！」 「ゴールまであとちよつとだよ！」

必死に走るランナーたちを沿道の方々が応援するのは、マラソン大会でおなじみの光景です。中学3年生のときに福岡マラソンの5・2キロ車いす競技に出場したしゅうすけ君。5キロ以上の大会に出場するのは初めてで、制限時間もあるため完走できるか不安だったそうです。それでも、沿道に途切れることなく並ぶ多くの観客の声援に後押しされて、無事走りきることができました。

10 しゅうすけ君が車いす競技と出会ったのは、小学3年生のとき。陸上競技用車いすは「レーサー」と呼ばれ、通常の車いすに比べて格段にスピードが出せるよう設計されています。そんなレーサーに初めて乗った時のことは今でも覚えています。「風を切って走るのを味わったのは初めて」と嬉しそうに語り、お母さんも「この子は走って感覚を知らなかったんだ」と、その時初めて気づいたそうです。

20 その後、学校の運動会にもレーサーに乗って出場しました。普段とは違う流線型の車いすをはじめて見た同級生たちは、「かっこいい！」 「僕も乗ってみたい！」 と興味津々。その日、しゅうすけ君はヒーローになりました。そのことが車いす競技に挑戦し続けるきっかけになったのです。

現在高校生のしゅうすけ君が普段練習している場所は、いつも多くのランナーが走っている公園です。レーサーに乗っているランナーや視覚に障がいのあるランナーなど、障がいのある人も、ない人も同じコースを走っています。お互いに走路を譲り合うマナーが自然と確立されています。しゅうすけ君自身も走っていて危険な思いをしたことはほとんどないそうです。「走る」ことを共有するランナー同士であるからこそ、互いに敬意を払うことが当たり前になっているのではないのでしょうか。障がいの有無に関わらず、お互いを思いやりながらいきいきと活躍できる社会を実現するため、私たちが自分でできることから始めてみませんか。